9/30 朝日

東教大文学部

強硬派教授締出しへ

本部が独自の授業計画

東京教育大文学部の授業再開をめぐる大学執行部と文学部教授会の話合いが不調に終り、宮島学長代行ら執行部は二十九日夜、同学部の授業再開計画を文学部教授会に任せることをあきらめた。執行部側は、三十日午後の評議会授業計画小委員会で大学として別個の授業計画を立案、十月上旬から学内での授業をはじめる方針を固めた。

大学側の方針によると、この授業計画は、さる六月"第二教授会"を結成し、すでに授業をはじめている文学部の英語多転費成派教官三十八人を中心に、現在の多数派教授会の中からも宮島代行の正常化路線に全面的に協力する教官を加え、不足分は非常勤講師で補おうという構想。構想通り実施されると、宮島代行を強固に応援している相当数の教官は、授業再開から実質的にしめ出されるという事態も起りそうだ。

二十九日は午後六時から、授業計画調整のための評議会授業計画小委が開かれ、入江文学部長が二十七日の教授会で決った「学内秩序保全に関する申合せ」を同学部の基本姿勢として提出した。

これに対して他学部代表から、十月から学内で授業を再開するためには、当面①宮島代行による現在の正常化路線への協力②全文学部教官の正門通過への参加③機動隊による封鎖解除のさい、文学部教授会が出した抗議声明など一連の声明の撤回、が必要だとして文学部側に要求した。

文学部側は同夜臨時教授会を開き、①現在の正常化路線は最善の方法ではないが、当面認める②執行部には全員参加する、との態度を決めたが、抗議声明の撤回は拒否した。

10/1 毎日

東教大

文学部に"破産宣告"

授業再開 学長代行の直轄で

東京教育大学の文学部授業再開に"苦情"をつけていた同大の学長代行当局は三十日、教授会のカリキュラム編成権を評議会に吸収し、学長代行直轄体制で授業を"再開"することを決めた。学生の検問問題などについて「これ以上譲れない」と回答した文学部に対し"破産宣告"を突きつけたわけだが、文学部側はあくまで学部としての授業計画を進めるといっており、これに対し学長代行当局は、学外から非常勤講師を招いて授業を強行する構え。最悪の場合は同じ講座に二つの授業が行なわれることも予想されるに至った。

教育大の紛争は教授会内の対立が特徴だが、これが最も鋭く現われたのが、ここ数日の宮島代行派と文学部教授会派のやりとりだった。文学部教授会派はこれまで「ロックアウト下での"誓約書―検問授業"はやらない。ロックアウトが解かれても学生との同意がなければ再開しない」と宣言してきたが、今月十日、一報して「授業再開」に踏切った。大学法のタイムリミットに追われ"二年続きの留年、入試中止は避けたい"という心情が、これまでの方針を変えさせたといわれる。

しかし学長代行派は「文学部はこれまでの大学批判言動を自己批判し、検問制度など学長代行体制に協力せよ。さもなければ授業再開は認めない」ときびしい注文をつけた。

このため文学部は一度は学外での"寺子屋方式"の授業再開も検討したが、財政的なカベもあって、学長代行派との妥協を望み、機動隊常駐下では授業はしないなどの学生との約束を無視して、原則的には"検問"に同意した。宮島学長代行派も一時は「なんとかまとめたい」と譲歩の姿勢を示し、評議会に「授業計画臨時小委員会」を設け、妥協点を模索し続けた。

しかし、学長代行当局派は、その後も文学部側に"完全な自己批判"を求めるなど次々に難問を持出して譲歩を迫ったため、折りあいがつかなくなった。文学部側は結局、三十日の教授会で「これでは交渉のたびに条件をつり上げられる。これ以上は譲れない」と態度を決めて、午後からの授業計画臨時小委員会に臨んだ。

小委員会では①文学部カリキュラムは、文学部内学長代行派の三十八教官を中心に小委員会の権限で作り、不足する教官は非常勤講師を新規に入れて授業をする②文学部学生の検問は学長代行部局が行なう――との学長代行派の案を決めた。

なお、三十日午後、同大文学部の「学生大会実現実行委」（日共系）が東京目黒区の東大駒場キャンパスで"疎開学生大会"を開きスト解除を決めた。これで全学部でストが解かれたわけだが、自治会執行部は反日共系が握っており、大会の成立をめぐってもめそう。また、東大駒場で"疎開学生大会"を開きスト解除したのは二十四日の東京都立大学に続いて二校目。

10/1 毎日 よみうり

六日メドに授業計画

東教大 文学部ヌキで立案

授業再開をめぐって文学部と大学当局が対立している東京教育大学は三十日夜、文学部の授業再開のための小委員会を開き「文学部の授業計画は小委員会で立案、六日をメドに授業を実施する」ことを決め、同日から計画作成にはいった。この結果、教授会が従来慣例として持っていた授業計画立案の権限は実質的に大学側に吸い上げられたかたちとなるが、一連の紛争で大学当局が学部をヌキにして授業計画の立案に乗り出すのははじめて。

10/1 産経

執行部の案で6日から授業

東教大文学部

大学執行部と文学部教授会が対立している東京教育大（宮島竜興学長代行）では三十日午後、授業計画小委員会を開いて文学部の授業再開の条件について検討した。この結果、同委は「同学部は大学執行部を批判する態度を改めていない」として、文学部が提出していた授業計画を破棄。すでに授業をはじめている三十八人の文学部教官（第二教授会）を中心に非常勤講師を動員し、十月六日から執行部案による授業をはじめることを決めた。これで同大文学部は就波移動計画はかりか授業計画からもはじき出されたことになり、完全に面に浮いた形となった。